絶望娘
成人向

絶望娘

# マエガキ

## ■マフマフ

前書き：
【絶望】ぜつぼう
（名）スル
すっかり望みをなくすこと。希望を失うこと。

【娘】むすめ
(1)親にとって、女の子供。息女(そくじょ)。
(2)若い未婚の女性。　（goo辞書調べ）

つまりは、そういった本です
（おいおい！ なんと無責任なんだ、マフマフは）
最後までお楽しみいただけましたら幸いです。

## ■浜岡ポン太

マフポコ活動同人誌第1冊目です。わー!わー!
楓ちゃん好き好き！ 千里ちゃん好き好き！ (;´Д`)ハァハァ

1冊になって嬉しい限りですー。
楽しんで頂けるともっと幸せな気持ち。

マフマフ 原作シナリオ　ポン太 絵描き
という感じで絶望娘お届けですー。

描くともっと好きになっちゃってまだ作業残ってるのに
次の本の事ばっかり考えてます。エヘヘ。

先生抱いて下さい

木津さん…

## 千里ちゃんの純情

その後ろに隠しているモノはなんですか？

うふふ先生気付いちゃったんですか

！

そんなの脅迫じゃないですか！

いい加減きっちりと私を抱いてください！

ね、先生…

ホラ

むにゅむ

!!

…ッ

絶望した！

もにょ♡もにょ♡

男がアドバンテージを取れない性交渉に絶望した！

そんな事言ったって最近の男子はマグロな人ばかりじゃない

えっ？

して

絶望した！

むにゅ むにゅ むにゅ

マグロの消費量だけでなく

マグロ男子生産量も世界一な日本に絶望した！

そんな事を言っても先生だってまぐろなんでしょ

ふにゃっ

！

してあげる先生…

でてきちゃったよ

ぱくっ

いけませッ…！

ちゅぷ

ちゅるる

あッ…あああッ！

ん♡

じゅぽ…じゅぽ…

おっきくしてあげます

あ

ちゅ

ぴくッ

ちゅぷ

うあ…

んん♡

じゅぽ…じゅぽ

んふ

くぅッ
ビクッ
キィぎぁ
んっ
プーすぷ
ドルッ

絶望した！
気持ち良くて拒否出来ない自分に絶望した！
…拒否できないなら…私の初めて貰ってね
きっ…！
ぱっ
ぬぷ
ぬぷ
ぬぷ

絶望した！
初めてを貰ってと言いつつ自分から私を犯そうとする強行犯的な女子生徒に絶望した！
うるさいなぁ つべこべ言わないで
きっちり私に喰われなさい
ああっ
……きっつ
はっ
は
入ったッ…よ センセ…イ…

でも…んッ

絶望した！

処女だけでなく童貞まで失われたという恥ずかしい自分に絶望した！

ッ!!ララッ…

はぁ

え？

はっ

はぁ♡

……嬉しいよぅ

はぁ♡

先生はじめてだったの？

そうですよ！

悪いですか

ドキッ

絶望した！
どう考えても
ヤンデレな彼女に
胸をキュンとさせた
自分に絶望した！
さっきから
絶望しっぱなしね
先生
良くして
あげるッッ
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
すごい
すごいのぉ！
ぱん
ぱん
ぱん
あん
あぁあぁあッッ！
ずぶちゅ
ずぶちゅ
ずぶぶ
12

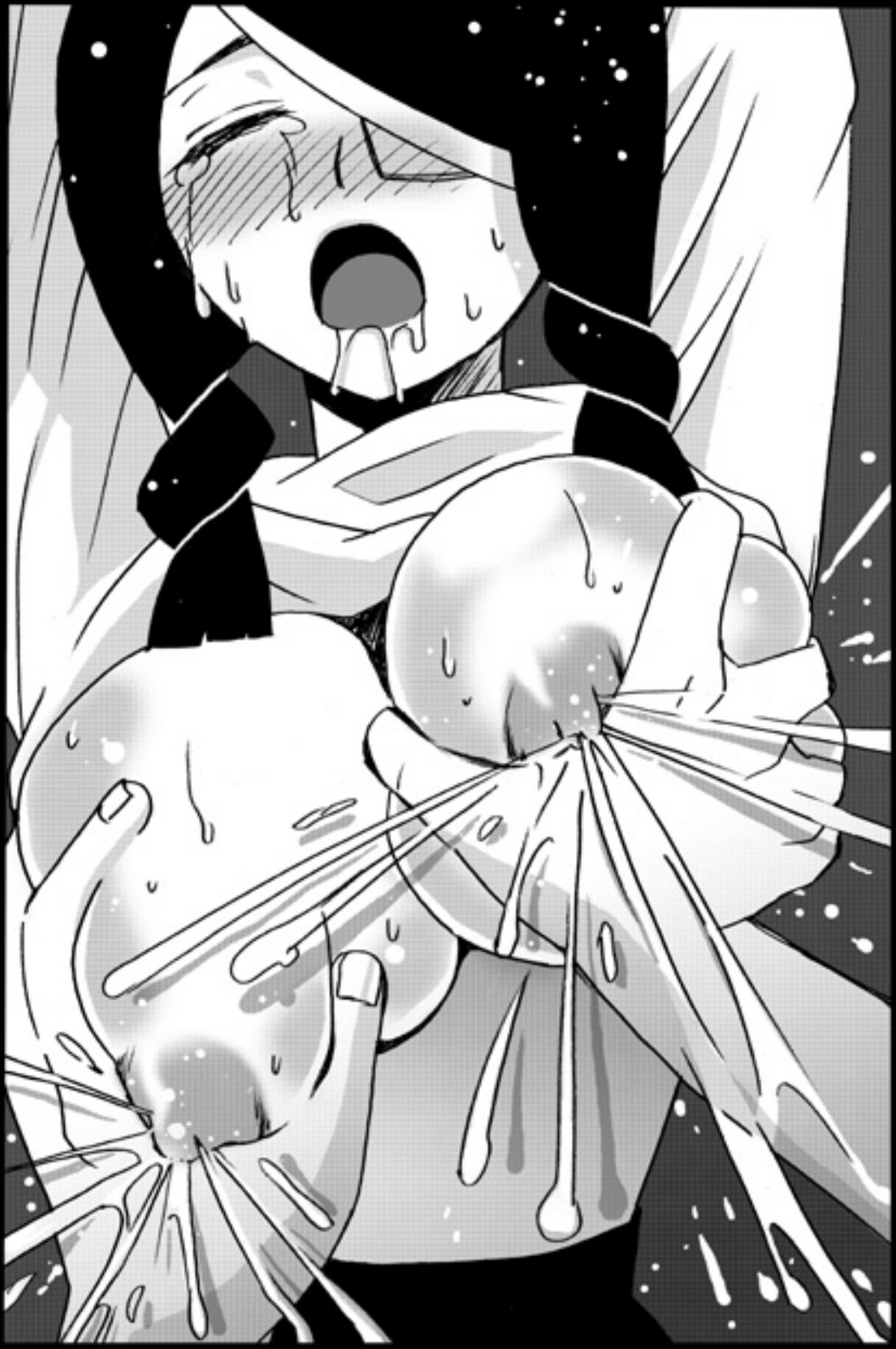
ぐちゅぽ
ぐちゅぽ
ぐちゅぽ

絶望した！
はじめてのセックスで数秒しかもたないという早漏ぶりに絶望した！
と言うか避妊もしないで中に出してしまうというある意味男らしい自分に絶望した！
…先生絶望してる所悪いけど実は私7日前に生理が終わったの
なっ！
ヌッ
どっ
それはまさか
そう超危険日なのよ
ぎっ
絶望つれてかぁー！
それから10カ月後二人の間に第一子が誕生する
オギャー
命名
糸色 頂

「ああッ！ だっ、ダメぇ！ 先生ぇ！」
「まったく、どういうことですか、小節さん」
先生の手には余るほどのボリュームある乳房を、乱暴に掴む。鷲掴みにし、思いきり揉みしだく。
「おっぱいがこんなにも大きく成長してしまって、いやらしい生徒さんですね」
「そんなこと言われても、成長期ですから」
フッと口元で笑んだ先生は、二つの乳首をキュッと摘んだ。
「ひぅッ、ひいいん」
「気持ちいいでしょう？ 小節さん。アナタのおっぱいはアナタが気持ちよくなりたいが故に、こんなに大きくなってしまったのですよ？」
「ウソです。そんなことでおっぱいが大きくなるなんて、聞いたことありません」
「事実なのですよ、小節さん。現実を受け入れなさい！」
先生は強く言葉を言い放ち、巨大な乳房を大きな円を描くように、むにゅりむにゅりと揉み上げる。
「やはぁん、先生、変に、変になるぅ」
「変になるのですか？ こんなに感じてしまって、スケベな生徒さんですね」
あびるは目を閉じて、顔を背ける。しかし先生はあびるの顔を掴み、無理やり自分の方へと向けさせた。あびるは目を閉じたまま、先生の方を向いている。
「恥ずかしいよ、先生」
「何をはずかしがっているのですか？ あんなに激しいセックスをした仲でしょう？」
あびるの頭に、先生との行為がフラッシュバックした。心の奥に仕舞い込んでいた記憶が、無理やり引きずり出される。
あびるの顔が羞恥に歪んだ。目の端にうっすらと涙が浮かぶ。
「あ、あれは、先生が」
「あれって、なんですか？」
あびるの言葉を遮る様に、先生は乳房をぎゅうっと握り締めた。
「やッ！ はあぁぁん！」
“びゅるるッ”
乳首の先端から、白い液体が放射された。あびるが放った薄白色の汁、それはミルクだった。
「小節さん、すごいですね、お乳が噴出しましたよ！」
「え？ そんな！ ウソ……」
あびるは目を半分だけ開き、自分の乳首に目を移す。乳首とその周辺が、白色汁で濡らされている。
「これ、一体どのくらい出るんでしょうね。調べてみますか」
先生は乳房の付け根を掴み、上に向かって絞り上げる。
「や！ や！ やぁああ！」
“びゅるッ、びゅるるるるッ”
先ほどとは比べ物にならないくらいに、大量のミルクが噴出した。
「小節さん、お乳を噴出す女子高生だなんて、エロすぎですよ？ お乳が出る巨乳を持つ女生徒さんですか？ そんなの、存在自体がエロすぎです」
「そんな、ひどい。先生、わたしエロくなんてないです」
「エロいですよ、ご覧なさい、ご自分のおっぱいを！ これのどこがエロくないと言うのですか！？」
あびるのおっぱいは、ミルクでべったりと濡らされ、先生の手もびっしょりと濡れていた。ミルクまみれのあびると先生、ひどくエロい光景である。
「わたし、そんな、わたし……」
あびるは恥ずかしい気持ちで、胸が潰されそうになる。そんな羞恥にさいなまれるあびるを、先生は薄笑いを浮かべて見つめる。
「そういえば小節さんは、動物のしっぽが好きでしたね」
「は、はい、わたし、しっぽフェチなんです」
「そうですか、なら、先生のしっぽをあげましょう」
「先生のしっぽって……きゃッ」
先生は袴のすそを掴み、一気にずり上げた。そして、ぶるんと揺れた愚息が現れる。
あびるは目の前にぶらさがっている、男のモノから顔を背ける。
「何を照れているのですか？ これはアナタの中に入った、大事なち●ぽじゃないですか」
「そんな、そんなこと言わないでよぉ、先生」
先生はあびるのスカートの中に手を入れ、薄い布で隠されている茂みに触れる。
「やっ！ だめ、さわらないで、先生」
あびるは開いていた太ももを閉じ、先生の手を挟んで押さえた。しかし、手の動きを止めたのはいいが、先生が指を伸ばすと、指先が茂みにまで届いてしまう。先生はあびるの茂みをすりすりとさする。
「せ、先生、そこ、そこはダメだよぉ」
先生はあびるの言葉を無視し、茂みをさすり続ける。
「そうだ、小節さん。今から検査をします。卑猥な下着をつけていないか、身体検査です」
先生はおもむろにスカートをめくり上げた。
「や、いやぁ」
あびるはごくごく普通の、白い木綿のパンツを履いていた。しかしそのパンツは、どんなエロ下着よりもエロく変り果てていた。あびるのパンツは、大量の愛汁を吸い、ぐっしょりと湿っていたのだ。そして、ぷっくりとした突起が、パンツの中心部に浮かび上がっている。あびるの愛芽は、すっかり勃起してしまっていた。
先生はその突起を、中指の先でくにゅくにゅとこねる。
「ああッ！ 先生、ダメです！ それ、だめぇ！」
あびるを隠している布が、更に水っぽく変色していく。もう吸えないというほどに大量の汁を吸ったようで、布越しなのに先生の指が濡らされる。
「すごいですね、こんなに濡らして。そんなに私としたいのですかね」
そう言って先生は、愚息をあびるの茂みに近づけていく。
「だめ！ それはだめぇ！ 先生、それはダメなのぉ」
「何がダメなのか、先生にはわかりません。挿れちゃいますよ？ 小節さん」

先生はパンツを横にずらし、あびるのお●んこをあらわにする。
「いやぁ！ やめてぇ！ はずかしいよ！ やめてぇ！」
あびるの抵抗の声が、空しく響く。先生は愚息の先っぽを膣口にあてがった。
くちゅり。
ひどく卑猥な水音がした。先生の愚息に、熱い体温が伝わる。あびるのお●んこはひどく火照っていて、とろとろにとろけていた。
「小節さん、アナタのお●んこが、先生を欲しいとおねだりしていますよ」
「やぁ！ 変なこと言わないでください！ そんなことないです、絶対にないです！」
「そうは言っても、簡単に挿っちゃいますよ？」
先生は腰を、勢いよく突き出した。
「あッ！ あああああぁぁんッ！」
あびるは甘い悲鳴を上げながら、先生の愚息を受け入れた。奥の奥まで、先生の愚息が入っていく。
先生は根元まで挿れると、腰を動かして愚息を出し入れする。
「あッ！ あああ！ 先生！ あぁぁぁんッ！」
「動物のしっぽなんかより、人間のしっぽの方が遥かにいいでしょう？」
「いい！ いいッ！ 先生、いいよぉ！ 先生のしっぽ、良すぎだよぉ！」
強烈な快楽に負け、あびるは素直な気持ちを漏らしてしまう。先生が不敵に笑う。
「なら、もっとよくしてあげますよ？」
先生は愚息にグッと力を込め、更に硬くした。
「ひっ！ ひあぁぁぁぁぁッ！ 擦れる！ 擦れちゃうぅッ！」
硬みを増した愚息が、あびるの肉壁をえぐるように擦り上げる。あびるはたまらず腰を跳ね上げ、膣をきつく締める。先生の愚息がぎゅううと締めつけられ、先走り汁がびゅるりと絞られた。
「や、やん、なんだか、熱いのが出たよぉ」
「しょうがないですね、小節さんは、そんなに締めてきて。膣に出しちゃいますよ？」
「出しちゃうの？ こないだみたいに、膣に出しちゃうの？」
「そうですよ、膣にたっぷり出してあげますよ。小節さんの奥の奥に、びゅーびゅー、びゅーびゅーとね」
あびるは顔を真っ赤にし、恥ずかしそうに目を細める。
「先生、この前、バージンの私を無理やり犯して、中出ししちゃったんだよね」
「何を言っているんですか、あなたから誘ってきたのでしょう？ 先生のことが好きだって、告白してきたじゃないですか」
「だからって、いきなり押し倒して、無理やりしっぽを挿れるなんて」
「しっぽ？ ああ、お●んちんのことですか？」
あびるは更に目を細めた。羞恥に顔が歪む。
「や、やああ、い、言わないでぇ」
「おや、小節さん、恥ずかしいのですか？ お●んちんを挿れられたことが」
ストレートな先生の物言いに、あびるはひどく強い羞恥を抱く。そして、絶えられなくなる。先生の言葉を拒むように顔を左右に振り、そして訴えかける。
「いやぁ！ 恥ずかしい、恥ずかしくて変になっちゃう。しっぽ、しっぽなの！
これはしっぽが入ってるんだもん」

「まったく、ちゃんと見てごらんなさい。入っているのはしっぽじゃなく、
先生のお●んちんですよ」
先生はあびるの頭を掴み、下腹部に顔を向けさせる。あびるの目に、膣を激しく突いている、淫靡な性交シーンが映り込む。先生が差し入れるたびに、膣の周辺からぶじゅぶじゅと愛汁が溢れ出る。
「やっ！ やぁぁ！ こ、こんなの、こんなの見せないでぇ！」
あびるは首に力を込め、逃れようとする。しかし先生の手の力の方が力強く、逃がしてはくれない。
「まったく、いやらしいですねぇ、小節さん」
先生はあびるの耳元で囁く。
「見せないでって言うわりには、そんなにジッと見つめてしまって。そんなに嫌なら、目を閉じればいいじゃないですか」
確かにその通りである。嫌なら見なければいい。しかし、あびるは目を閉じることが出来なかった。そのひどくいやらしく、淫靡な光景に、あびるはすっかり魅了されていた。恥ずかしいのに、嫌なのに、目を背けられない。心では嫌がっていても、頭が受け入れてしまっている。
「そんなにセックスが好きなのなら、もっともっと、よくしてあげます！」
先生は全力で腰を打ちつける。周囲にパンッ！ パンッ！ と、肉が打たれる音が響く。
「ああっ！ だめぇ！ そんなの、い、イっちゃう！ イっちゃうようぉ！」
「いいですよ、小節さん、好きなだけイキなさい。イってもやめませんからね」
「そ、そんなぁ、ああッ！ イク！ イクぅ！ イクぅぅぅッ！！」
あびるは全身をビクンと震わせ、同時に膣をぎゅうううッと締め上げた。
あびるの全身に甘い衝撃が走る。
「ふふッ、果ててしまわれたようですね。ですが、このまま続けますよ、小節さん」
きつく締めつけられても、先生はおかまいなしに、愚息をずんずんと突き挿れる。
「だッ！ ダメェ！ そ、それ、変に！ 変になっちゃう！ イッてるの、
わたし、イッてるのぉ！」
「知ってますよ、イッているのなんて。知ってて突いているのですよ」
「やぁ！ やぁ！ あんッ！ また！ またきちゃう！ きちゃうよぉ！」
あびるはビクビクッと腰を跳ね上げ、再び膣を締め上げた。
「またイッてしまったのですか。本当にどスケベで、どうしようもなくいやらしいですね、小節さん」
「そんな、そんなこと無いです。わたし、スケベなんかじゃ」
「何を言っているんですか。ち●ことま●こが繋がって、出し入れしているところを夢中になって見つめて！ 今なんて、何度も何度も絶頂を繰り返して、
とてつもない淫乱娘ですよ！」
「違う、違うもん！」
「違いませんよ、あなたはド淫乱です！ 絶望した！ 弐回目のセックスで
イきっぱなしになる、超がつくほどの変態な教え子に絶望した！」
先生はスパートとばかりに、全速力で腰を打ちつける。激しすぎるピストンのせいで、愛汁が秘花の周辺に飛び散る。



あびるの太ももが、愛汁でびっしょりと濡らされていく。そしてその汁を、まかれている包帯が吸いこんでいく。
「絶望した！ アナタはド変態です！ 絶望した！ 小節さん、アナタに絶望した！」
「違う！ わたし、違う！ そんなんじゃない、そんなんじゃないです！」
先生はあびるの耳元で、何度も絶望したといい放つ。あびるはそれを拒否するように言い返す。しかし、罵られる度に、あびるの膣からは愛汁が大量に溢れてくる。
先生の言葉の暴力に、あびるは感じてしまっている。
「小節さん、とっても気持ちよさそうですねぇ。お顔が気持ちいいって、いやらしく笑っていますよ？ もっともっとして欲しいって、スケベな顔で先生を見ていますよ？」
「違う！ そんなことないよぉ！ ないです！」
あびるは必死に否定する。しかしあびるは顔を上気させ、目をとろりとさせ、うっとりと嬉しそうに先生を見つめていた。
「絶望した！ 小節さん、アナタには本当に絶望した！」
「いやぁ！ 先生！ わたし、気持ちいい！ 先生、気持ちいいッ！」
快楽に支配されたあびるは、もう否定すらできない。何度も突かれ、何度もイかされ、あびるの頭の中には気持ちいいという言葉しか浮かんでこない。
「絶望した！ 絶望したッ！ 絶望したぁぁぁぁぁぁ――――――――ッッ！！！！」
「あッ！ あああッ！ あああぁぁあああああ――――――ッッ！！！！」
先生の愚息が大きく揺り動く。そして、びゅるんッ、と熱い塊が、あびるの奥にぶち当たる。あびるの子宮が、白くねっとりとした汁を浴びた。
先生の絶頂と同時に、あびるも絶頂を迎えた。今までイかされた中で、一番に強烈で激しい絶頂。あびるの頭の中が真っ白になる。何も考えられない。まるで先生の白い汁が、あびるの全身を包んでしまったかのように、あびるは真っ白い気持ちとなった。

「それにしても、小節さん」
「なんですか、先生」
先生とあびるは、汚れた性器をポケットティッシュで拭っている。
「アナタお乳が出てしまうなんて、本当に節操がありませんね」
あびるは不思議そうに顔を傾ける。
「と、言いますと？」
「まったく、妊娠しているなんて、いったい誰と寝たのですか？」
あびるは不思議そうに、更に顔を傾ける。
「えっと、先生ですよ？」
「は？ ええと、言っている意味がわかりません」
先生の頭に、大きなハテナマークが浮かんだ。
「わたし先生としか、していません」
先生の頭に、大きなビックリマークが浮かんだ。
そして少し考えるように、顔を俯かせる。しかしすぐに、目を見開いてあびるに言った。
「そんなことは無いでしょう！ だって小節さん、初めてだったじゃないですか！」
「そうですよ、初めてのセックスで、妊娠したんです」

先生は深く考え込む。そして肩を落としながら、頭を下に向ける。
しかしすぐに、目を見開いてあびるに言った。
「そんなことがありますか！ 初球でいきなりホームランなんて、どんなスポ根野球マンガですか！」
「大当たりです、先生」
あびるはニヤマリと笑んだ。
先生は顔を上げ、大気圏を貫かん勢いで叫んだ。
「ぜぇぇぇつぅぅぅぅぼおおおおぅぅぅ、した――――――――――――ッッッ！！！！！」

それから十ヶ月後、二人の間に第一子が誕生した。命名「糸色 愛」

（おわり）

カエデの一人上手

毎日毎日先生を想って

オナニーしてるんです…！

あーッ せんせぇっ♡

あーッ あぁはあ

ぐちゅ

ぐちゅ

こうやってたくさんつまんでこすって…

ぬるぬる

あいい♡ いいよ

いじめて

あッ やめられないにょぉぉ♡

はー

あー♡

そうしていたら

はー

ぎゅー

すぅ

はー

クリトリスも乳首もすごく大きくなってしまって

あーあーんしごくのいいのおおっいっぱいイっちゃうーっ♡

ああぁ♡〜♡〜♡〜!

ビクン

いっぱいしたから色も黒ずんできて

ビクン

は…ん

こんなのぅ先生にみせられません…

PINKNIPPL

クリがピンクになるクリームを塗ったの…

あ♡

あ♡

それでやっと

ピンク色になった私の見て欲しかったんです
楓さん
私を想ってそんなにいやらしい身体になってしまって…
あう…
ぴくん
ぴくん
はっ
見ッ…♡
ピーン!
キャあ
ビクッン
あッダメ先生乳首をつまんだら私ッ!

ぺろ
あ
ぢゅるっ
あんっ
あぁっ
ぐっ
ぷぁ
キレイです
とても美しい
乳首とクリトリス
ですよ
楓さん…
あぁダメェッ
おっきくなったらぁ♡
クリクリ
あぁ
おかひくっ
なりてぇっですぅっ
あぷっ
そんなぁ
恥かしいですぁぁ…は

!!
ぎゅっ
あの…
あの…
あの…
あの…
はぁん
くちっ
くちっ
くちゅっ…
ぷるっ
ぷるっ
ニリっ
ニリニリ
あぁ
あの
あの
知っていますよ
楓さん
あ
私ッ
はじめてで…
ぷるん
ブリ
手!!
ヤ
あッ

パンッ
パンッ
ずぽっ
ぬぽ
パンッ
んんッ!!
ビッ!!
んーッ
ヒーヒッ
ひっ
ひっ
ひっ
うぅん
パン
んあ
あう
パン
パン
ぷちゅ
ぷちゅ
ぷちゅ
パン
ひあ♡
あ♡
私の大きくなったロリが…
あたって♡
ひん♡
あ、あそこも
クーリモッ♡
パン
パン

ひぁあぁぁ〜♡
パンパンパン
イクのぉぉ♡
ビクッ
ビクッ
ビクッ

はあ♡
恥ずかしい…
私こんなに淫乱で
とても恥ずかしい
はあ♡
はあ♡

ちゅぱ
あーはー
ビッ
ビッ
ドックン
ドクドク
ビクビク
ぐぐぐ
あぁ
中に出されてるのぉ
あっついのぉ♥
でてまぁすぅ♥

…はぁ…はぁっ 楓さんっ

先生…♡

……

…訴えてやる

え？ は！

私の同意もなく傷物にして！これはレイプよ！

訴えてやる！

そんな！

それに私の乳首とクリトリスの秘密まで暴いて！

訴えてやる！

ちょ！それは楓さんが教えてくれたのですよ

私は知らないって言ってるでしょう

といて！

！

中出しまでして！

訴えてやる！

絶望した！
まったくもって申し開きが出来ない状況に絶望した！
先生私7日前に生理が終わったの
なっ それはまさか…
そう超危険日なのよ
それから10カ月後二人の間に第一子が誕生する
オギャー
命名 糸色 壁

# アトガキ

朝であれば、おはようございます。昼であれば、こんにちわ。
夜であれば、おやすみなさい（ええ？）はじめましての方は、はじめまして。マフマフと申します。
「みんなでマフマフ」（マフマフ個人サークル）の本を読んだことのある方は、見たことがある
書き出しですよね。すみませんです（もう謝った!）
えーと、みなさん、愛してます（いきなりだな、おい!）
この本を手にしている方は、無条件で愛させていただきます（勝手だな、マフマフは）
文章書きなボクちんは（絵が書けないので文章書きなのですよ……）、前々から「ボクちんの文章が
マンガになったらなぁ」という夢を、心の中で描いていました。
叶いました（てへ）
本当にありがたい限りです。あまりにもありがたいので、寝るときはポン太のいる方向に足を向けられません。
そのせいで常に北枕になっているのは内緒ナイショ（残念だな、マフマフは）
そしてこの本を手にしていただいた皆様も、深く感謝です。やはり寝るときは足を向けられません。
とはいえ、皆様がどこに住んでいるのか分からないので、これからは立って寝ます（大変なことになりました）
これからも懲りずに作品を生み出して参りますので、皆様、よろしくでございます!

浜岡ポン太です。
楽しんで頂けましたでしょうかー
すごく作画に時間がかかりました。
マフィー（マフマフ）には去年の年末には原作を貰っていま
して、待たせたな! という気持ちでいっぱいです。ごめっ
原作と漫画は多少の違いがあります。
それは作画の都合でアレンジさせて貰っています。
ブログサイトの方に原作文を載せて置きますので
是非遊びに来て下さいー!
絵も漫画もたくさん更新したいよ・・・・？

次の女の子本も絶望娘2を予定しております。
次の表紙娘は小森タンです。
ではではマフボコ第一冊目お手にとって頂き
ありがとうございました!!! ぶちゅー!

# 絶望娘 Vol.I

発行
マフポコ

発行者
浜岡ポン太
マフマフ

URL:http://mahupoko.blog62.fc2.com/

本書の無断転載(スキャン、コピー等)を禁じます。

ZETSUBOU MUSUME
2008